

多職種協働による発達障害児の保護者に対する支援活動の意義 —「紫波の子育てを応援する会 あれんと」の運営及び実践に着目して—

佐々木全¹⁾・細川恵子²⁾・阿部圭子³⁾・岩泉康喜⁴⁾・菅原文彦⁵⁾・関口栄子⁶⁾・
八重嶋幸子⁷⁾・伊藤典子⁸⁾・川村みや子⁹⁾
(令和3年2月1日受理)

SASAKI Zen, HOSOKAWA Keiko, ABE Keiko, IWAIZUMI Kouki, SUGAWARA Fumihiko,
SEKIGUCHI Eiko, YAESHIMA Yukiko, ITO Noriko, KAWAMURA Miyako

The Significance of Support Activities for Parents of Children with Developmental Disabilities
through Multi-professional Collaboration

: A case study of "the Shiwa-town child-raising support group ARENTO"

I. 問題と目的

発達障害者に対する公的な支援は、2004年の発達障害者支援法や、2007年の改正学校教育法を後ろ盾にした発達障害者支援センターの設置や特別支援教育の開始によって本格化した。その後、現在に至るまでに発達障害の認知率や発見率は急速な高まりを見せている。このことは、支援者や支援機関に対して、迅速かつ有効な機能を要請するものである。

このような状況下において、支援を求める発達障害者やその家族に対して、必要時に最適な支援が提供されることを目指したインフォーマルな支援グループ(以下、市民団体と記す)による事業がある。その一例が、岩手県の紫波町^{注1)}を拠点とする「紫波の子育てを応援する会 あれんと」(以下、「あれんと」と記す)である。「あれんと」は2014年に結成され現在まで独自の事業を展開している。その結成の趣旨ならびに事業内容については、紫波町教育委員会事務局こども課のホームページにて以下のように公表されている^{注2)}。

紫波の子育てを応援する会「あれんと」は、紫波町内で子育て支援に携わっている医療・教育・保育・福祉・親の会の関係者が、有志で立ち上げた団体です。近年の著しい社会状況の変化を受け、子育てに悩む保護者がどんどん増えている状況を肌で感じ、「いてもたってもいられない」と平成26年3月に結成。以来、子育て相談会や、保護者を対象としたペアレント・トレーニング(ペアトレ)講座、支援者を対象としたリーダー研修会、地域の連携体制を広げるための紫波町子ども拡大ネットワーク会議などを定期的に開催しています。

併せて、「あれんと」の事業方針について以下のように公表されている。

発達障がいについての認知が広まってきたことで、岩手県内でも医療の受診ニーズが高まっていますが、多くの医療機関で受診予約が数ヶ月先になってしまっている状態が続いています。しかし、不安を抱えた保護者さん、そして日々成長している子どもたちにとって、数ヶ月という時間はとても長く辛い期間だと思います。あれんとでは、困っている親御

1) 岩手大学大学院教育学研究科 2) NPO法人紫波さぶり 3) みすず広場 4) ラーニング・サポート・しわ
5) 岩手県スクールカウンセラー 6) 紫波町立日詰小学校 7) 障害者地域生活支援センターしんせい
8) 紫波町立虹の保育園 9) 社会福祉法人新生会みちのく療育園

さんが、すぐ相談できるような場所をつくりたいという思いから、子育て相談会やペアトレを始めました。(中略)子育て相談会は現在、年4回ほど、町内にある虹の保育園を会場に開催しており、相談にいらっしゃる親子や保護者の方は、町内のみならず近隣市町村や県南からもいらっしゃる状況です。(中略)あれんとメンバーは、医療・教育・保育・福祉・親の会というそれぞれの分野を持っています。そのため、1つの分野だけでは難しいことでも、複数の分野でつながりを持ちながら対応していけるところが強みだと思います」とあれんと活動の特長を話します。

ここでは、多職種協働が「あれんと」の強みとして挙げられている。そもそも、多職種協働は、一般的には、医療分野や福祉分野を中心に特定分野内で発展してきた。しかし、近年では、異なる複数の分野を横断して総合的に顕在化する対象者の支援ニーズへの対応が求められる(例えば、菊地, 2000; 根元, 2009; 村田, 2011; 吾妻・神谷・岡崎他, 2013; 平野・竹田・大田他, 2015; 小澤・泉・神尾他, 2018)。

このような情勢を背景としつつ、市民団体である「あれんと」における多職種協働が、どのように機能し、何に奏功しているのだろうか、それが明らかになれば、「あれんと」と同様に発達障害者とその家族の支援をミッションとする市民団体にとって参照価値のある情報になるだろう。

そこで、本研究では、「あれんと」における運営実態と支援活動の成果と課題ならびに、多職種協働の意義を明らかにする。

Ⅱ. 「あれんと」における運営実態とその評価

1. 目的と方法

「あれんと」の運営実態とそれに関する自己評価について明らかにする。そのために「あれんと」における運営実態調査を実施した。ここでは、岩手県内の8支援団体を対象とした運営実態調査(佐々木, 2012)の質問項目を用いた。「あれんと」の代表者に対して、2019年7月に質問紙を送付し

回答として求め、8月に回収した。不明な点などは、第一筆者が「あれんと」の代表者に照会した。

調査項目は以下のとおりである。まず、フェイス項目として「活動名」「運営母体の団体名」「運営代表者名」「支援対象地域」「支援対象者」「活動の目的」「立ち上げの時期」「事業内容(調査前年度の事業実績を例示)」について記述にて回答を求めた。

次いで、運営実態に関わる項目として「運営状況に関する自己評価」として「年間を通じて安定的に活動できているか」を問う。

さらに、運営状況に関して次の3つの観点をもって問う。すなわち①「人的環境の実態」(スタッフに関する事柄)、②「経営的環境の実態」(経費に関する事柄)、③「実働的環境の実態」(会場や物品に関するハード面、活動内容のアイデアに関するソフト面)である。これらに関する自己評価、内容及び課題について選択及び記述にて回答を求めた。選択肢は「必要十分」「最小限は満たしている(余力がほしいというニュアンス)」「やや不十分(助力が欲しいというニュアンス)」「不十分」であった。また、それぞれの課題点について記述にて回答を求めた。最後に、運営上の課題を自由記述にて求めた。

2. 結果

運営実態調査によれば、「あれんと」は、2014年に結成された。支援対象エリアとして、紫波町を拠点としつつも、岩手県全域を支援対象地域として想定しており、「発達特性のあるお子さんとその家族」を支援対象者とし、「発達特性のあるお子さんの家族に対し、その子育てを多職種協働でサポートする」ことを目的としていた。ここでは、「多職種協働」という手法が目的に含まれており、この手法自体の価値の発信に力点があると理解された。

「あれんと」の事業内容については、2018年度の内容を例として、Table 1に示した。これによると「定例会」として運営スタッフによる打ち合わせが実施されていた。また、主たる事業として「子育て相談会」があり、年4回実施されていた。

Table 1 「あれんと」の活動実績

事業名	回数/年	内容	参加者、会場等
定例会	12回	運営に関するミーティング	運営スタッフ9名 @地域相談しんせい、 みちのく療育園
子育て相談会	4回	相談対応（保護者支援）	スタッフ10名、来談者 85名 @虹の保育園
ペアレント・トレーニング	4グループ に対し で8回	ペアレント・トレーニングの実施 （保護者支援）	スタッフ4名、参加者 20名 @NPO法人紫波 サブリ
みすず広場	24回	相談対応（保護者支援）	スタッフ2名、参加者 240名 @紫波町社会 福祉協議会
ネットワーク会議	4回	関係者、関係期間の情報交換	スタッフ8名、参加者 120名 @オガール、 保健センター
出版	1回	子育ての啓発リーフレットの作成 と配布	500部発行

「あれんと」の運営実態について、「年間を通じて安定的に活動できているか」という問いに対して、「概ねできている」との回答だった。「活動の目的は実現しているか」という問いに対して、「十分にできている」との回答だった。

次いで、観点別に運営実態とそれに対する自己評価を以下に記した。なお、これらに関連する「8団体実態調査」の結果を併記し比した。

（1）人的環境

まず、活動の企画や連絡調整など運営を担う「中核スタッフ」についてである。「あれんと」の中核スタッフは9名であった。「運営を円滑に進めるにあたり必要十分か」という問いに対して、「必要十分（万全）」とのことだった。中核スタッフの内訳は、医師（1名）、教育関係者（3名）、保育士（1名）、障害福祉関係者（3名）、保護者（1名）である。「あれんと」では、複数の中核スタッフによって組織的に運営されている。職員は、活動の日程や会場の確保、参加者との連絡や会計業務等、いわゆる事務局業務を担う。

次に、活動を担う「実働スタッフ」についてである。「あれんと」の「実働スタッフ」は11名であった。「運営を円滑に進めるにあたり必要十分か」という問いに対して、「必要十分（万全）」とのことだった。実働スタッフのうち9名は中核スタッフが兼ねていた。他の2名はいずれも医療従事者であった。

最後に、中核スタッフと実働スタッフのコミュニケーションについてである。「活動を円滑に進め

るにあたり必要十分か」という問いに対して、「必要十分（万全）」とのことだった。これは、運営スタッフが実働スタッフを兼ねていることによると理解された。

（2）経営的環境

「あれんと」の自己評価と実態は、「運営や活動を円滑に進めるにあたり必要十分か」という問いに対して、「やや不十分」とのことだった。事業参加者の実費負担や助成金の獲得によって賄っていた。経費の内訳は、講師謝金・昼食費、交通費、行動費、事務費などであった。

（3）実働的環境

まず、ハード面（会場、使用物品）についてである。「あれんと」の自己評価と実態は、「運営や活動を円滑に進めるにあたり必要十分か」という問いに対して、「必要十分（万全）」であり、固定的に使用できる施設があった。具体的には、定例会や子育て相談会においては運営スタッフの所属機関を会場としていた。また、ネットワーク会議やみすず広場は、紫波町内の公共施設を借用しているが、この借用手続きについても円滑に実施されていた。また、公共の施設を借用する場合についても円滑に借用できているとのことだった。

使用物品（備品、消耗品を含む）は、「活動を円滑に進めるにあたり必要十分か」という問いに対して、「やや不十分」とのことだった。使用物品は各スタッフの持ち出しによるものであり、これが改善点とされた。

次に、ソフト面（活動内容の企画）についてである。「あれんと」の運営実態とそれに対する自己評価は、「活動内容のレパートリーは、活動計画を立て、実施し、それなりの成果を得るにあたり必要十分か」という問いに対して、「やや不十分」とのことだった。このことは、「事業を県全体に展開したり、スタッフを増員したりするための周知活動の不足」とされた。これは、現状における課題というよりも、活動の発展を想定した将来構想中の課題といえた。

（4）その他

運営に関する課題として、改善の必要性、緊急

性が最も高い事柄は、「お金」「人（次世代を育てていくこと）」が挙げられた。活動の運営や活動における工夫点は、「ゆるくつながること」「少人数でやること」とされている。また、事業内容として必要性を感じていることに、ペアトレ、教員研修が挙げられた。

4 考察

「8団体実態調査」(佐々木, 2012)によって把握された市民団体の運営実態の自己評価内容と、「あれんと」を比較対照した。まず、「8団体実態調査」の結果における人的環境は、市民団体の最大の関心事であった。中核スタッフについては、組織化の未確立があり、一人の中核スタッフの過重負担や業務の継承のしにくさなどのリスクが想定された。また、実働スタッフの不足や未定着が挙げられた。これは活動の実施への影響が懸念された。これに対して「あれんと」では、「必要十分(万全)」とされた。ただし、運営に関する課題として「次世代(のスタッフ)を育てていくこと」とあるように、「必要十分(万全)」の評価は、現状に対するものであり、将来展望の中では懸念があった。

次に、「8団体実態調査」の結果における経営的環境は、市民団体のいくつかにおいて、経費不足に対する不安、参加者の経済的負担への思慮、ボランティアの交通費への思慮が挙げられていた。これに対して「あれんと」では、「やや不十分」とされた。このことは、実働的環境における使用物品の不足の状況の要因と言えた。ここでは相応の資金繰りがなされているものの、確約のなさによる不安に起因するようであった。

最後に、「8団体実態調査」の結果における実働的環境のうち、ハード面である会場については、市民団体のいくつかにおいて、その恒常性、利便性、経済性に関わる課題があった。これに対し「あれんと」では、「必要十分(万全)」とされた。また、「8団体実態調査」の結果における実働的環境のうち、ソフト面である活動内容の企画については、市民団体のいくつかにおいて、活動レポートやノウハウ自体の不足や対象年齢との不一致

などの懸念があった。これに対して「あれんと」では、「事業を県全体に展開したり、スタッフを増員したりするための周知活動の不足」として、現状に対するものよりも、将来展望の中での不足が語られた。

総じて、「あれんと」では、資金繰りにおいて負担と不足がやや生じているものの、現状においては、運営や活動を円滑に進められていた。このことは、運営や活動におけるスタンスとして語られた「ゆるくつながること」「少人数でやること」とする中核スタッフの結束が根幹にあると見受けられた。それは、多職種協働ゆえに、それぞれが有する資源の共有によって、運営や活動が相補的・有機的に支えられていることにも象徴された。例えば、活動の会場確保においては、スタッフ相互の所属機関を借用、活用することがあった。また、将来構想では、次世代のスタッフの発掘・育成が必須であるが、そこには、スタッフの交代の都度、中核スタッフの結束の維持が求められよう。

Ⅲ. 「子育て相談会」の評価

1. 目的と方法

「あれんと」における支援活動の成果と課題を明らかにし、そこで発揮されている多職種協働の意義を明らかにする。そのために、主たる事業内容である「子育て相談会」に関する成果と課題を明らかにする。

そのために、「子育て相談会」における満足度調査を実施した。ここでは、3回(2019年9月、11月、2020年2月)の開催時に来談した62名を対象とした。調査項目は以下の通りであった。まず、フェイス項目として「来談者の居住地」「来談者の子どもの年代」「紹介経路」「利用の動機」「保護者自身に必要なこと」「自由記述」について記述にて回答を求めた。次に、「相談対応の結果」について「あれんと」の相談対応記録から集約した。

さらに、「子育て相談会」の満足度調査として、目的変数1項目(「Q1:「子育て相談会」に参加してよかった」と、説明変数8項目(「Q2:相談の中で、自分の思いを十分に聴いてもらえたと思

う」「Q3:相談の中で、自分の考えが整理できたと思う」など)、計9項目を質問項目とし、次のような5件法で回答を求めた。また、分析の際はそれぞれを点数化した。すなわち「1:全くあてはまらない(1点)」「2:あてはまらない(2点)」「3:どちらともいえない(3点)」「4:あてはまる(4点)」「5:よくあてはまる(5点)」である。これらの分析には、CS(Customer Satisfaction)分析(管, 2013)に基づき、統計分析研究所株式会社アイスタットが提供する専用ソフトを用いた^{注3)}。この手順では、まず各項目について、回答数に対する「5:よくあてはまる(5点)」と「4:あてはまる(4点)」の割合をもって「満足率」を算出する。次に、説明変数である他の8項目について、目的変数との相関係数を算出する。前者を「満足度」と称して縦軸、後者を「重要度」と称して横軸として散布図を描画する。その上で、説明変数8項目における満足度と重要度の平均値をもって散布図を4象限に分割する。これによって「満足度と重要度が共に高い項目」「満足度が低い重要度が高い項目」「満足度が高い重要度が低い項目」「満足度と重要度が共に低い項目」として視空間的に分類し解釈することができる。併せて、説明変数8項目について「改善度指数」を算出する。これは、平均値座標から各項目の座標位置までの距離であり、改善の優先順位をより明確にするものである。

なお、本稿の執筆及び公表については、「あれんと」の運営者並びに関係者に対して趣旨説明し許諾を得た。「子育て相談会」における回答者に対しては、個別に文書と口頭にて調査の趣旨を説明したうえで協力を依頼した。このとき、協力が任意であり、協力しないことや中断することがあった場合にも不利益がないことなどについて合わせて説明をし、理解と承諾を得た。

2. 結果

(1) 「来談者の居住地」「来談者の子どもの年代」「紹介経路」

「来談者の居住地」について、Fig. 1にその内訳を示した。これによれば、紫波町38名(61%)で

あり、近接する自治体である花巻市7名(11%)、盛岡市6名(10%)、矢巾町5名(8%)が続いた。その他(北上市など)が6名(10%)であった。

「来談者の子どもの年代」と「紹介経路」について、Fig. 2とFig. 3にそれぞれの内訳を示した。年代は、「小学校」が32名(51%)、「就学前」が26名(41%)であり、紹介経路はこれに符合したかのように「学校・保育所」が36名(58%)であった。両者の内訳をその内訳を示した。

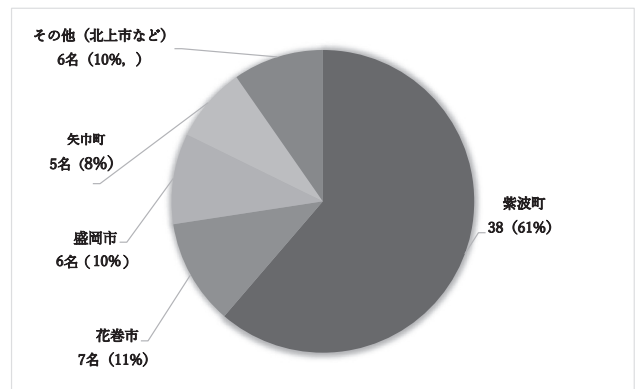


Fig. 1 来談者の居住地

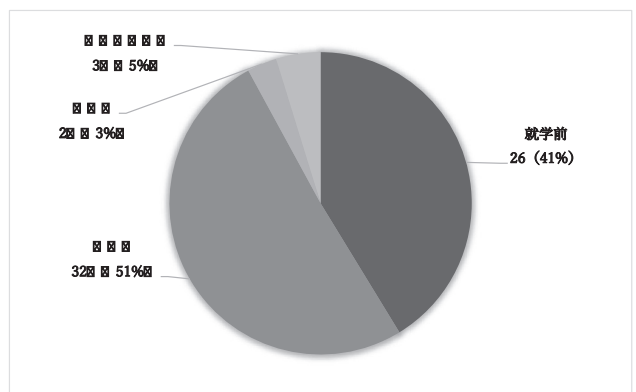


Fig. 2 来談者の子どもの年代

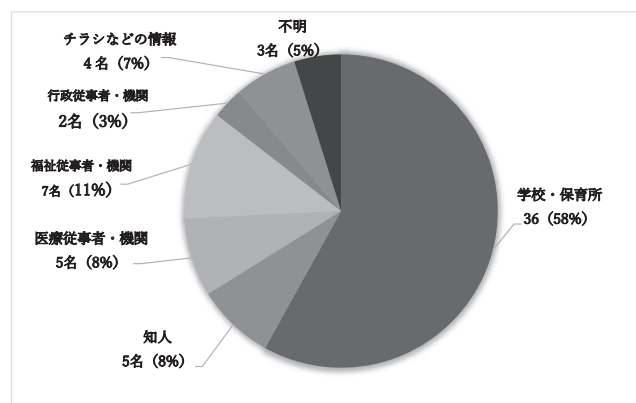


Fig. 3 紹介経路

(2) 来談の動機

来談の動機について、記述にて回答を求めた。この結果58名から回答を得た(回答率93.5%)。これについて、記述内容毎に分類し、分類ごとに命名し定義した。なお、ここでは記述内容をもって分類したため、データ数と回答者数は必ずしも一致しない。

この概要として、分類名、定義、回答内容の例をTable 2に示した。これによれば、来談の動機として、「子育ての不安」「子育ての方法の希求」「保護者自身の心理的限界」「第三者からの意見や助言の希求」の4分類と「その他」が得られた。

(3) 保護者自身が現状の子育てにおいて必要と考えていること

保護者自身が現状の子育てにおいて必要と考えていることについて、記述にて回答を求めた。この結果58名から回答を得た(回答率93.5%)。これについて、記述内容毎に分類し、分類ごとに命名し定義した。なお、ここでは記述内容をもって分類したため、データ数と回答者数は必ずしも一致しない。

この概要として、分類名、定義、回答内容の例をTable 3に示した。これによれば、保護者自身が現状の子育てにおいて必要と考えていることとして、「子育てに対する心構え」「子どもに対する思いと関わり」「援助要請」「生活条件」「未自覚・不明確」の4分類が得られた。

(4) 自由記述

自由記述では、32名から回答を得た(回答率51.6%)。これについて、記述内容毎に分類し、分類ごとに命名し定義した。なお、ここでは記述内容をもって分類したため、データ数と回答者数は必ずしも一致しない。

この概要は「対応への満足」と「対応への要望」に大別できた。それぞれの分類名、定義、回答内容の例をTable 4とTable 5に示した。これによれば、前者として、「情報・助言が得られたこと」「価値観が得られたこと」「見通しが得られたこと」「謝意の表明」の4分類、後者として「事業拡大への期待と要望」と「改善要請」の2分類が得られた。

Table 2 来談の動機

分類名	定義	回答内容の例(回答数)
子育ての不安	子どもに対する理解や子育ての展望が得られないことに対する不安	「子どもの発育・気持ちなどに不安があったため」「子どもの行動で気になることがあった」など(12)
子育ての方法の希求	子どもに対する理解や対応に関する方法論の求め	「もっと子どものことをわかりたいと思ったし、向き合いたいため」「子どもにどう対応したらいいか悩んだため」など(17)
保護者自身の心理的限界	子育てに対して、行き詰まっている心理状態	「自分一人では解決できないと思ったから」「一人で抱え込みたくなかった」「学校の先生に理解してもらえず、困っていたから」など(7)
第三者からの意見や助言の希求	子育てにかかわる多角的な見解の求め	「学校以外で相談がしたくて」「専門の人にも話を聞いてみたかった」など(9)
その他	上記以外の個別具体的な記述内容	「前回参加してよかったと、周りの方からのお話があったから」「友だちに怪我をさせてしまったため」など「放課後デイサービスを利用してみたいため」など(13)

Table 3 保護者自身が現状の子育てにおいて必要と考えていること

分類名	定義	回答内容の例(回答数)
子育てに対する心構え	子育てに対する信念としている内容	「楽しむこと」「がんばらないこと」「待つ余裕を持つこと」「広い視野と情報」など(22)
子どもに対する思いと関わり	子どものかかわりにおいて留意していることや信条としている内容	「息子を信じ、粘り強く接すること」「子どもをほめること」「子どもを理解する」「子どもときちんと向き合うこと」など(17)
援助要請	子育てにおいて、他者に協力を求める内容	「協力者」「たくさんの人に触れあつて、たくさんつながりをもつこと」「相談先」「子どもに対する周囲の理解が得られること」など(15)
生活条件	子育ての基盤としての生活に関わる内容	「生活条件」として「ゆくりした時間」「生活費」など(4)
未自覚・不明確	自身が必要とするについで見いだせていない状況	「まだ手探り状態で不安なことがいっぱい」「わからない」など(4)

Table 4 自由記述「対応への満足」

分類名	定義	回答内容の例(回答数)
願望が得られたこと	保護者自身の心情を十分に受け止められたという実感	「親身に聞いてもらえて救われた」など(8)
情報・助言が得られたこと	保護者にとって有益な情報や助言が得られたという実感	「明確に様々な教えてくださりとても勉強になりました」など(7)
価値観が得られたこと	保護者にとって有益な考え方が得られたという実感	「うまくいっている時の方が大事、つながっていることが大事だと知りました」など(2)
見通しが得られたこと	保護者にとって有益な子育ての見通しが得られたという実感	「今後どのようにしたらよいか等を教えてもらいよかった」などの表現(6)
謝意の表明	「子育て相談会」に対する満足を感謝の表現によって示した内容	「今悩んでいることを全部相談することができ、実際に試していきながらやってみようという気持ちになりました。ありがとうございました。」など(8)

Table 5 自由記述における「対応への要望」

分類名	定義	回答内容の例(回答数)
事業拡大への期待と要望	「子育て相談会」に対する発展的な要望	「相談会の日程が増えるといいと思います」「生活面で困っていることを解決してあげたいと思います」など(4)
改善要請	「子育て相談会」に対する苦情内容	「バタバタと次々と話が進んで、何の目的で次の予約を取るのか説明がなく、不安に思うことが多かった」「ホームページから探すのが難しかった」(2)

(5) 対応としての紹介内容

「あれんと」による対応について、Fig. 4にその内訳を示した。これによれば、来談者62名に対する対応（支援機関等の紹介）の内訳（延べ73名）として、最多は「地域資源」で22名（30%）であった。このうち19名は、「あれんと」事業のペアレント・トレーニング、1名は「あれんと」事業の「みすず広場」、盛岡市の支援活動が各1名だった。次いで、「医療」で16名（22%）であり、1名を除き全て「あれんと」のスタッフを擁する病院であった。「教育」で13名（18%）であり、来談者居住地の教育委員会が2名であり、それ以外は全て「あれんと」のスタッフ（小学校教員、巡回相談員など）であった。また、「福祉」は6名（8%）であり、この全てが、「あれんと」のスタッフ（相談支援専門員）を擁する事業所だった。以上のように、主な紹介先は、「あれんと」のスタッフの本業が主であった。

一方、「相談のみ」として16名（22%）があった。これは、他の資源への紹介を行わなかった事例であった。

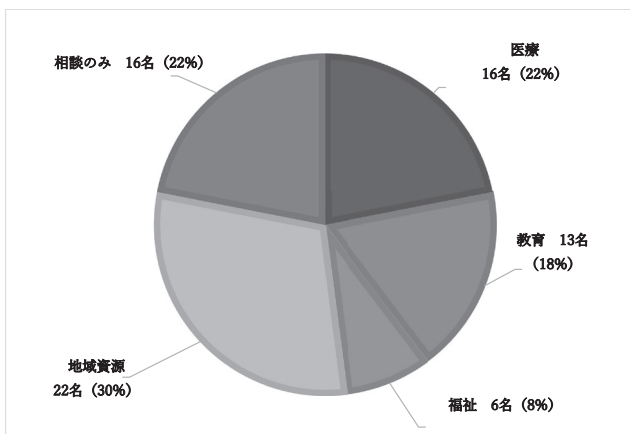


Fig. 4 「あれんと」による対応

(6) CS (Customer Satisfaction) 分析

来談者62名からの回答から、各項目の平均、満足率、相関係数、改善度指数をTable 6に示した。各項目の平均は4.23～4.89であり総じて高かった。また、満足率（満足度）と相関係数（重要度）をもって散布図を作成し、「子育て相談会」におけるCSグラフとした。これをFig. 5に示した。これ

によると、「満足度と重要度が共に高い項目」に該当した項目は、「Q 2:相談の中で、自分の思いを十分に聴いてもらえたと思う。」であった。これは、目的変数「Q 1:「子育て相談会」に参加してよかったと思う。」の評価への貢献があり、実際に満足が得られていたという意味で、本事業の成果であると言えた。

「満足度が低い重要度が高い項目」に該当した項目は、「Q 6:相談することによって、子育てに関する方法がわかった。」「Q 7:相談することによって、子どもに対する理解が深まった。」の2項目であった。なおこれらは、改善度指数が高い上位2項目であった。これは、目的変数「Q 1:「子育て相談会」に参加してよかったと思う。」の評価への貢献が想定されながらも、実際には満足が得られていない。裏を返せば、この項目の満足度の向上が「Q 1:「子育て相談会」に参加してよかったと思う。」の満足度の向上につながると考えられ、その意味で本事業の課題であると言えた。

なお、「満足度が高い重要度が低い項目」に該当した項目は、「Q 8:対応したスタッフの話す内容は的確だったと思う。」「Q 9:対応したスタッフの態度は適切だったと思う。」の2項目であった。これらは、目的変数「Q 1:「子育て相談会」に参加してよかったと思う。」の満足度の向上への貢献は少ないものの、実際に満足が得られていたという意味で、本事業の成果である。ただし、他の項目に比して改善の優先順位は低いと判断された。「満足度と重要度が共に低い項目」に該当した項目は、「Q 3:相談の中で、自分の考えが整理できたと思う。」「Q 4:相談の中で、自分のすべきことが明確になったと思う。」「Q 5:相談の中で、子育てに関する不安が和らいだと思う。」の3項目であった。これは、目的変数「Q 1:「子育て相談会」に参加してよかったと思う。」の満足度の向上への貢献は少ないため、これらの満足度向上を目指す際には他の項目に比して改善の優先順位は低いと判断された。

Table 6 各項目の平均, 満足率, 相関係数, 改善度指数

質問項目	平均	満足率	相関係数	改善度指数
Q1 「子育て相談会」に参加してよかったと思う。	4.84	83.87	1.00	---
Q2 相談の中で、自分の思いを十分に聴いてもらえたと思う。	4.71	74.19	0.57	2.85
Q3 相談の中で、自分の考えが整理できたと思う。	4.44	54.84	0.39	0.51
Q4 相談の中で、自分がこれからすべきことが明確になったと思う。	4.53	58.06	0.38	-1.05
Q5 相談することによって、子育てに関する不安が和らいだと思う。	4.45	56.45	0.28	-5.51
Q6 相談することによって、子育てに関する方法がわかった。	4.23	40.32	0.48	11.18
Q7 相談することによって、子どもに対するの理解が深まった。	4.48	58.06	0.50	5.83
Q8 対応したスタッフの話す内容は的確だったと思う。	4.76	79.03	0.40	-7.48
Q9 対応したスタッフの態度は適切だったと思う。	4.89	90.32	0.35	-15.97

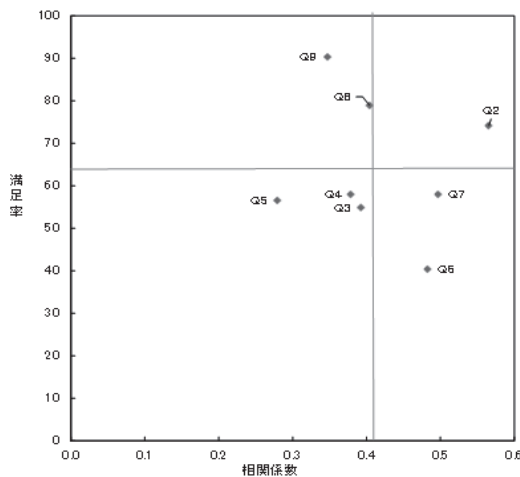


Fig. 5 「子育て相談会」におけるCSグラフ

3. 考察

「子育て相談会」の来談者に対する満足度調査の結果から、本事業の成果と課題を示し、その上で、多職種協働の観点からこれらを検討した。

まず、「子育て相談会」は、主に紫波町在住の就学前幼児及び小学生の保護者の相談に対応していた。ここでは、相談内容に応じて当該分野を専門とするスタッフが選定され、対応し、その上で、主に各スタッフの本務への紹介がなされていた。ここでは、多職種協働の強みが遺憾なく発揮されていたと言えよう。

次に、満足度調査から、「子育て相談会」の成果として「傾聴ニーズ」の充足があった。これに関して、来談者の22%への対応として「相談のみ」で紹介がなされない例があったが、この来談者は現状において「紹介」することよりも「傾聴ニーズ」が重視された結果だった。このことに関して、「あれんと」のスタッフは「子育て相談会」にお

ける支援方針「つなぐこと（最適な地域資源を紹介すること）」（2019.6.10.定例会における聴取）を前提としつつも、「傾聴ニーズ」の充足が最優先である来談者が一定数いる頃を想定していた（2020.3.11.定例会における聴取）。

課題としては「助言ニーズ」の充足であり、具体的には「子育てに関する方法」「子どもに対する理解」の提供が挙げられた。このことは「子育て相談会」における支援方針「つなぐこと」に至る過程の中で必然的に生じるニーズであるとも考えられる。最適な資源につないだ後にこそ本格的な助言ニーズの充足を想定しながらも、「子育て相談会」という過程にあって、来談者の納得が得られることをめざしたい。

総じて、「子育て相談会」は、「聴くこと」「つなぐこと」において、多職種協働の強みを発揮していた。特に支援方針である「つなぐこと」に着目するならば、この機能を維持する上では、次の2つが必要であると考えられた。

1つは、各スタッフ自身が地域資源であると同時に、それ以外の地域資源に関する情報と実際的なネットワークを有する必要がある。ネットワークの内容は、自身の専門分野における職務上、必然的に得られるネットワークがある。一方で、多様な相談ニーズへの対応として、「外部資源に関する情報や接触可能な関係性」という「予備的なネットワーク」（佐々木・東・池田他,2018a;2018b）を得ることも必要かつ有効であろう。このことに関して、既に「あれんと」事業の中にその努力内容があった。例えば、「ネットワーク会議」での関係者の交流が「予備的ネットワーク」づくりの一機会となる。また、2019年度の定例会では、貧困家庭の児童生徒に対する学習支援を担うNPO法人や、障害のある児者のきょうだいの支援を担う市民団体のスタッフを招聘しての情報収集（2019.6.10.及び2019.8.19.）を実施した。さらには、その発展として研修事業の共同開催（2019.11.17.）や相談事例の紹介があった。

さて、「あれんと」の機能を維持する上で必要となることのもう1つは、将来構想において多職種

協働を維持するために、次世代のスタッフの発掘・育成が必要不可欠であるが、ここでは、現状と同様に各分野の専門家が得られる必要がある。すなわち、現在の「あれんと」のスタッフは自らの分野における後継者をそれぞれに求めることが必要かつ重要である。

Ⅳ. まとめと今後の課題

本研究では、「あれんと」における運営実態と支援活動の成果と課題ならびに、多職種協働の意義を求めた。そのために、まず「あれんと」の運営実態を評価した。ここでは、現状における概ね順調な取り組みと、将来展望における懸念がいくつか示された。また、その運営スタンスの表明には「ゆるくつながる」というフレーズがあった。そこには市民団体として、インフォーマルゆえの緩やかで自由な発想が根底にあると察せられた。このことが、ニーズに即応した事業を展開する動機や要領になっているのかもしれない。いずれ、今後、「あれんと」の経年的な変化とそれへの対応策について、実際的に把握し運営及び実践にかかる方法論を見出すことができれば後進の市民団体にとっての参照価値が得られるであろう。

次に、支援活動の評価として「あれんと」における主たる事業である「子育て相談会」に着目し、来談者からの評価を得た。ここでは、多職種協働の強みが発揮され、概ね来談者の満足が得られた。今後、「ペアレント・トレーニング」や「みすず広場」などの他事業の評価などを含めて、多面的活総合的に、多職種協働の価値を精査する必要があるだろう。

最後に、「あれんと」は、多様な地域性を有する岩手県において、地域資源である各分野の専門家が結成した希有な事例であった。かつて、岩手県における発達障害者支援の草分けとなった「岩手LD相談室」は、研究者を中心として臨床心理士、作業療法士、特別支援学校教員による多職種協働の事業であった。1991年から2011年まで、対象児のアセスメントと保護者への助言指導を中心とする事業を展開した（田中・加藤・木村他、2002；

岩手LD研究会、2011）。ここでは、スタッフ相互の本業への紹介はあったにせよ、現在において、「あれんと」の「子育て相談会」に見る積極的かつ実効的な地域資源に「つなぐ」ということは実現されていない。このことは、地域の資源が未開発であった当時であっての限界であった。それに比して考えれば、「あれんと」の多職種協働は、今日的な状況に適合した機能であるといえよう。

岩手県各地において「あれんと」と同様の課題意識を有しながら点在する関係者がいるならば、「あれんと」の組織や事業内容というコンテンツよりも、「あれんと」が現状をいかに見極め、それに適合しているかというスキルに着目し、参照されたい。

注 釈

注¹) 紫波町は、岩手県の県央部に位置し、人口3,309人、12,290世帯、18才以下の人口5,316人、9つの行政区を擁す(2020.2.当時)。http://www.town.shiwa.iwate.jp/soshiki/1/1/8/2211.html (2020.4. 6. 閲覧.)

注²) 紫波町教育委員会事務局こども課のホームページにおける「岩手県紫波町の子育ち・子育て応援サイト」にて「あれんと」の団体紹介記事が公開されている。http://www.town.shiwa.iwate.jp/kiracha/dantai/5488.html (2020.4.6. 閲覧)

注³) 統計分析研究所 株式会社アイスタットが、フリーソフトとして「Excel多変量解析ソフトウェアver.5」を提供している。https://istat.co.jp/ (2018.1.15. 閲覧, ダウンロード)

謝 辞

本研究について、ご理解ご協力をいただきました皆様に感謝申し上げます。本研究の一部は、地域課題解決プログラム（令和元年）の採択事業として助成を受けました。ここでは、障害者地域生活支援センターしんせいの田代拓之所長ならびに岩手大学教育学部学生の本宮綾華さんと和野彩月さんのご尽力を賜りました。また、岩手大学教育

学部の「附属学校特別支援教育連携専門委員会」の協力を得ました。心より感謝いたします。

文 献

- 吾妻知美・神谷美紀子・岡崎美晴・遠藤圭子 (2013) チーム医療を実践している看護師が感じる連携・協働の困難, 看護学・リハビリテーション学編, 7, 23-33.
- 平野聖・竹田恵子・大田晋・種村純・進藤貴子・直島克樹・森繁樹 (2015) 医療福祉における多職種連携のあり方に関する研究, 川崎医療福祉学会誌, 24 (2), 209-220.
- 岩手LD研究会編 (2011) 岩手発 発達障害のある青年たちの現状と展望—連携, その実質化を願って—. 岩手LD研究会.
- 管民郎 (2013) Excelで学ぶ多変量解析入門, オーム社.
- 菊地和則 (2000) 多職種チームの構造と機能—多職種チーム研究の基本的枠組み—, 社会福祉学, 41(1), 13-25.
- 村田真弓 (2011) 医療福祉専門職の多職種連携・協働に関する基礎的研究—各専門団体の倫理綱領にみる連携・協働の記述から—. 人間関係学研究, 13, 159-165.
- 根元治代 (2009) 障害者相談支援における多職種チームの構造と機能, 学苑, 821, 118-128.
- 小澤温・泉真由子・神尾陽子・竹之内章代・藤井明日香 (2018) 発達障害支援を巡る教育と医療, 福祉, 労働との連携. 発達障害研究, 40 (1), 19-30.
- 佐々木全 (2012) 発達障害児(者)に対する「本人活動」における運営実態—岩手県内8グループを対象としたアンケート調査から—, はなまき軽度発達障害児の教育と生活を支援する会, 年報花童・風童, 8, 27-41.
- 佐々木全・東信之・池田泰子・名古屋恒彦・北條早織・根木地淳・岩館良子・菊池明子・坪谷有也・滝田充子・及川藤子 (2018a) 通常学級における特別支援教育を効果的に実践するための連携スキルに関する探索的研究 (7) —保育園

や学校等における外部連携に着目して—岩手大学教育学部プロジェクト推進支援事業教育実践研究論文集, 5, 137-142.

- 佐々木全・東信之・池田泰子・名古屋恒彦・下山恵・阿部真一・照井正孝・佐藤信・石川えりか・及川藤子・坪谷有也 (2018b) 通常学級における特別支援教育を効果的に実践するための連携スキルに関する探索的研究 (9) —外部連携に資する予備的ネットワークづくりに着目して—岩手大学教育学部プロジェクト推進支援事業教育実践研究論文集, 5, 149-154.
- 田中弘美・加藤義男・木村真・那須弘明・漆畑輝映・佐藤正恵・鈴木康也・三田祐一 (2002) LD及びその周辺児が抱える問題と支援について, LD研究, 11(1), 1-11.